

むかし、ある山の奥おくに、炭焼きの夫婦がいました。炭焼き小屋のそばに小さな家を作って、そこで暮くらしていました。

ある日のこと、お殿とのさまが狩かりに出て、家来けらいたちにはぐれ、道まじに迷まよってしまいました。ひとりぼっちで、行き暮くれて、山の中をさまよっていると、小さなあかりを見つけました。行ってみると、そこは、炭焼きの家でした。お殿とのさまは喜んで、お殿とのさまだとは気づかれないうようにして、

「一晩泊とめてもらえないか」とたのみました。炭焼きは、

「いまちようど、妻つまが子どもを生むところですよ。もうしわけないが、この家には泊とまってもらう場所がない。炭焼き小屋でよければ、お泊とりください」といいました。お殿とのさまは、「寝ねることができさえすれば、炭焼き小屋でけっこうです。それから、何か食べるものをお願いできませんか。一日じゅう何も食べていないので、お腹なかがすいてたまりません」といいました。

炭焼きは、残のこっていたわずかなお米でおかゆをたいて食べさせてやりました。お殿とのさまは、おいしそうに食べ終わると、炭焼き小屋で寝ねました。

夜よなか中に、お殿とのさまがふと目を覚さますと、戸の外でだれかが立ち話はなをしているのが聞きこえました。耳みみをすませていると、ふたりはどちらも神かみさまのようで、こんなことをいっていました。

「さきほど、炭焼きの家で男の子がうまれました。わしは、運命うんめいの矢やをさしてやりましたぞ」と、ひとりがいうと、もうひとりが、

「なんとさしたんです」とききました。

「この国の殿とのさまには子どもがいらないから、炭焼きの子が殿とのさまの世継よつぎぎになれと矢やをさしました」

お殿とのさまは、これを聞いておどろきました。炭焼きなどの子が後継ごせいぎになるのは困こまる、その子をなき者にしようと、お殿とのさまは考えました。

あくる朝、お殿とのさまは、炭焼きに、泊とめてもらったお礼れいをいって、

「ところで、昨夜生まれた子をわしにくれなうか。わしの後継ごせいぎとして育てよう」と申し出ました。炭焼きは、

「それはありがたいことです。うちは貧しくて、子どもを育てることができませんが、あなたはお金持ちのようですから」といって、承知しました。そこで、お殿さまは、炭焼きの子どもをもう約束をして、お城に帰っていきました。

まもなく、お殿さまはふたりの家来に、炭焼きの子を迎えに行かせました。そして、家来たちに、とちゅうで、子どもを川に流すようにと命じました。

家来たちは、炭焼きの家に行くと、炭焼きに、

「あのかたは、お金持ちの旦那さんで子どもがいらないから、きっと、この子をりっぱに育ててくれますよ」といって、安心させました。それから、子どもを抱いて帰っていきました。

大川のほとりまで来ると、家来のひとりが、子どもを水に投げこもうとしました。すると、もうひとりの家来が、

「それは、あまりにかわいそうだ」といって、柴でいかだを作って、それに子どもを乗せて川に流しました。

さて、大川のそばに、漁師の夫婦が住んでいました。その日、夫は網をつくろい、妻は魚のえさを取りに川端に出かけて行きました。妻がえさをとっていると、川上から、小さないかだが流れて来ました。見ると、いかだの上に赤ん坊が寝ていました。妻は、おどろいて赤ん坊を抱きあげると、家にとんで帰りました。

「なんと、ありがたい拾い物でしょう」といって夫に見せると、夫も大喜びして、「うちには子どもがいらないから、たいせつに育てよう」といいました。

年月がたつうちに、赤ん坊は大きくなって、たいそうりこうな子に育ちました。

ところで、お殿さまにはやはり子どもがなかったので、国じゅうで一番のりこう者を後継ぎにしようと、探し回りました。そのうち、漁師の息子のうわさを聞きました。お殿さまは、このりこうな息子を気にいり、後継ぎにしたいと思いました。漁師夫婦は、お殿さまの命令ならばと、仕方なく、息子をさしあげました。

やがて、お殿さまがなくなると、この子があとを継いで国を治めました。

人間は、よかれあしかれ、運命の定めのとおりになるものだそうです。

おしまい

村上郁再話